

[B年] 聖霊降臨節第13主日(2026年8月16日)**【旧約聖書日課】ミカ書 6章1～8節**

- 1 聞け、主の言われることを。
立って、告発せよ、山々の前で。
峰々にお前の声を聞かせよ。
- 2 聞け、山々よ、主の告発を。
とこしえの地の基よ。
主は御自分の民を告発し
イスラエルと争われる。
- 3 「わが民よ。わたしはお前に何をしたというのか。
何をもってお前を疲れさせたのか。
わたしに答えよ。
- 4 わたしはお前をエジプトの国から導き上り
奴隸の家から贖った。
また、モーセとアロンとミリアムを
お前の前に遣わした。
- 5 わが民よ、思い起こすがよい。
モアブの王バラクが何をたくらみ
ベオルの子バラムがそれに何と答えたかを。
シティムからギルガルまでのことを思い起こし
主の恵みの御業をわきまえるがよい。」
- 6 何をもって、わたしは主の御前に出で
いと高き神にぬかずくべきか。
焼き尽くす献げ物として
当歳の子牛をもって御前に出るべきか。
- 7 主は喜ばれるだろうか
幾千の雄羊、幾万の油の流れを。
わが咎を償うために長子を
自分の罪のために胎の実をささげるべきか。
- 8 人よ、何が善であり
主が何を前にお前に求めておられるかは
お前に告げられている。
正義を行い、慈しみを愛し
へりくだって神と共に歩むこと、これである。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 4章17～32節

17そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、¹⁸知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。¹⁹そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまることを知りません。²⁰しかし、あなたがたは、キリスト

をこのように学んだではありません。²¹キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。²²だから、以前のような生き方をして情欲に迷われ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、²³心の底から新たにされて、²⁴神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。

²⁵だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。²⁶怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。²⁷悪魔にすきを与えてはなりません。²⁸盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。²⁹悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。³⁰神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。³¹無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。³²互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを救ってくださったように、救い合いなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章46～52節

46 一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとしたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。⁴⁷ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。⁴⁸多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。⁴⁹イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」⁵⁰盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。⁵¹イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。⁵²そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

ミカ書 6章1～8節

- 1 主が語ることをよく聞け。
立ち上がって、山々の前に告発し
峰々にあなたの声を聞かせよ。
- 2 山々よ、とこしえの地の基よ
主の告発を聞け。
主はご自分の民を告発し
イスラエルと論争される。
- 3 「わが民よ。
私はあなたに何をしたというのか。
何をもって、あなたを疲れさせたのか。
私に答えよ。
- 4 私はあなたをエジプトの地から導き上り
奴隷の家から贖ったではないか。
私はモーセとアロン、そしてミリアムを
あなたに先立って遣わしたではないか。」
- 5 わが民よ、よく思い起こせ。
モアブの王バラクが何をたくらみ
ベオルの子バラムがそれに何と答えたか。
シティムからギルガルに至るまで
主の正義の御業を考えてみよ。
- 6 何をもって主にまみえ
いと高き神にぬかずくべきか。
焼き尽くすいけにえか、一歳の子牛か。
- 7 果たして、主は幾千の雄羊
幾万のしたたる油を喜ばれるだろうか。
私は、自らの背きの罪のために長子を
自分の罪のために
胎から生まれた子を献げるべきか。
- 8 人よ、何が善であるのか。
そして、主は何をあなたに求めておられるか。
それは公正を行い、慈しみを愛し
へりくだって、あなたの神と共に歩むことである。

エフェソの信徒への手紙 4章17～32節

17ですから、私は主にあって語り、厳しく命じます。あなたがたはもはや、異邦人が空しい考えで歩んでいるように歩んではなりません。18彼らの知性は闇に閉ざされ、内なる無知とかたくな心のために、神の命とは無縁のものとなっているのです。19彼らは感覚が麻痺し、放縱に身を任せ、欲望のままにあらゆる汚れた行いにふけています。20しかし、あなたがたはそうにキリストに〔直訳→キリストを〕学んだではありません

ん。21あなたがたは、真理はイエスの内にある、とキリストについて聞き、キリストにおいて教えられたはずで。22ですから、以前のような生き方をしていた古い人、すなわち、情欲に迷わされ墮落している人を脱ぎ捨て、23心の霊において新たにされ、24真理に基づく義と清さの内に、神にかたどって造られた新しい人を着なさい。

25ですから、偽りを捨て、一人一人が隣人に真実を語りなさい。私たちは、互いに体の部分だからです。26怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。27また、悪魔に隙〔別訳→機会〕を与えてはなりません。28盗みを働く者は、もう盗んではいけません。むしろ、労苦して自らの手で真面目に働き、必要としている人に分け与えることができるようになりなさい。29悪い〔直訳→腐った〕言葉を一切口にしてはなりません。口にすれば、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるために必要な善い言葉を語りなさい。30神の聖霊を悲しませてはなりません。あなたがたは、聖霊によって、贖いの日のために証印を受けたのです。31恨み、憤り、怒り、わめき、冒涇〔別訳→悪口〕はすべて、一切の悪意と共に捨て去りなさい。32互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

マルコによる福音書 10章46～52節

46一行はエリコに来た。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出られると、ティマイの子で、バルティマイという盲人が道端に座って物乞いをしていた。47ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」と叫び始めた。48多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、私を憐れんでください」と叫び続けた。49イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい〔直訳→勇気を出しなさい〕。立ちなさい。呼びだ。」50盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。51イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、また見えるようになることです」と言った。52イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・8月16日「聖霊降臨節第13主日」の日課主題は「新しい人間」。

・旧約日課は、「ミカ書」から、主の告発されることを告げる預言句。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、古い生き方を捨てて新しい人を身に着けるべきことを教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスがエリコの町で盲人を癒されたことを伝える説話箇所。

旧約日課(ミカ6章より)

・「ミカ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」中の第四部「十二預言者(小預言者)」の6番目に置かれた預言文書。標題(1:1)によれば、本書は、前8世紀の南王国で三代の王(ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に仕えた宮廷預言者ミカが北王国および南王国の王権に対して告げた預言句集。預言者ミカは、「イザヤ書」の預言者イザヤとはほぼ同時代の人であり、両書に同じ預言句が現れるように(ミカ4:3とイザヤ2:4など)両者は同じ預言者集団に属していたと推認されるが、「イザヤ書」が標題で挙げる預言対象が「ユダとエルサレム」(すなわち南王国の王国全体と王権)であるのに対して、「ミカ書」は「サマリアとエルサレム」(すなわち北王国と南王国の王権)であり、両者は一部重なりながら異なる役割を担っていたものと考えられる。特に、ミカ書が「サマリア」を対象として明示しているが、ミカと北王国王権との関係性は明らかではない。なお、「ホセア書」の預言者ホセアも、標題によれば同時代の人であるが、北王国ヤロブアム王の名も挙げられており、イザヤやミカに先行して活動を始めていたと推認される。

・日課箇所は、法廷的な構成によって、主が人を告発するという体裁で、預言が告げられている。すなわち、1~2節は預言者が人々を主の告発を聞くべき場(法廷!)に呼び出す告知、3~5節は主の告発の言葉、6~7節は人々の弁明、8節は預言者の人々に向けた説諭、という構成で展開している。

・3~5節の主の告発は、正典「律法(トーラー)」で描かれる「モーセ物語」の出エジプト伝承を前提としている。「出エジプト伝承」を明示的に典拠とする預言句は、本書のほかの箇所では見られず、同時代の「イザヤ書」でも皆無である一方、「ホセア書」には見られる(ホセア12:14)。これは、預言者イザヤがもっぱら南王国の王権と国家を対象とした預言活動をしていたのに対して、預言者ミカが北王国の王権をも対象としていたことと関係があるかもしれない。すなわち、預言者ミカは、北王国出身の預言者ホセアを通して「出エジプト伝承」を知り、北王国に関連する文脈でこの伝承を用いた可能性が考えられる。

・7節の「長子」の犠牲は、「律法」では禁じられ、「初子」のための代償のささげものが規定されている(出13章など。創22章も参照)。本書がもっぱら北およ

び南の王権のもとにある人々を対象とした預言であることを踏まれば、この節の言説は、単に宗教的犠牲祭儀のこととしてではなく、政治的文脈における「長子」=王権継承権者の継承断絶あるいは留保という事態を背景にしているとも考えられる。「イザヤ書」7章で描かれているように、南王国ではアハズ王の時代に北王国ペカ王とアラム王国レツィン王から退位と王権移譲、すなわちダビデ王朝の断絶を要求される事態が生じている。他方の北王国でも、ヤロブアム王没後以降、激しい権力闘争が続き、王権が二代と維持されず頻繁に王朝が交代する事態に陥っていた。ペカ王もペカファ王から王権を奪取した王であり、また彼自身、ホシエアに王権を奪取されている。

使徒書日課(エフェソ4章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第5に置かれた書簡文書。本書の概要は、前回資料「聖書と祈りの会 260805」を参照。

・日課箇所は、「キリストの体」と譬えられる教会共同体が、一致の姿としての「体」を「成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆく」(4:16)べきものであることが説かれたのに続いて、信仰者各自がそれにふさわしい者とされるべきことが勧められている。

・17節「異邦人」は、他のパウロ書簡では民族的な意味で「ユダヤ人」以外の者を指して用いられることの多い用語であるが、本書では繰り返して取り上げられるいずれの箇所でも(2:11、3:1,6,8)、「イスラエルの民に属さず」(2:12)にいる状態の人々のことを指して言われている。ちなみに、本書では「ユダヤ人」が取り上げられることはなく、「イスラエル」も上述の箇所(2:12)以外には用いられていない。本書は、「キリストの体」に譬えられる教会共同体を、これまで閉じた状態であった「イスラエルの民」の枠組み(2:14「隔ての壁」)がキリストによって取り除かれ、かつて「異邦人」であった者が今や「イスラエルの民」の内に「一つ」にされていることを福音として明らかにすることを、ひとつの主題としている。

・23~24節「…古い人を脱ぎ捨て…神にかたどって造られた新しい人を身に着け」というキリスト者の自己理解に関する「着衣」の比喻表現は、パウロが好んで用いる表現(ロマ13:12、Iコリ15:53~54、IIコリ5:2,4、ガラ3:27、エフェ6:11,13,14、フィリ1:9、コロ3:10,12,14、Iテサ5:8)。特にガラ3:27などと合わせて理解するとき、パウロがここで「神にかたどって造られた新しい人」として考えている理想的人格が「キリスト」を想定していること、またこの「人を身に着ける」ということの出発点が「キリストと結ばれる洗礼」に置かれていることが、推察される。

・29節「造り上げる(こと)」は、ギリシア語「オイコドメー」で、原義は「家(オイコス)」を「建てる(デモー)」で、転じて「建築物」をも指す語。この語の動詞形「オイコドメオー」と共に、「パウロ書簡」で好んで用いられる用語で、「教会」や「人」に対して用いられている。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスが最後にエルサレムに入城される直前に立ち寄られたエリコの町で盲人を癒されたことを伝える説話箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「マルコ」だけが癒された盲人の名を「バルティマイ」と明らかにしているのに対して、「マタイ」は癒された盲人が「二人」であったとしており伝承に多様性が認められる。

・「エリコ」は、エルサレムから街道筋を経て約 30 キロの行程にある都市で、ヨルダン峡谷の中腹、標高(海拔)マイナス 250 メートルほどに位置する。周辺地域では最も早くに都市として形成された地と考えられており、都市としての考古学的痕跡は紀元前 1 万年ごろまで遡るとされる。旧約正典では、モーセに率いられてエジプトから出てきたイスラエルの民がヨシュアの指導のもとヨルダン川を渡りカナン地方に侵入してきた際、最初に攻略した都市としてエリコが取り上げられている(ヨシュア 2 章、6 章)ように、古来、この地域で主要な古都と認識されていたと考えられる。他方、四福音書は日課箇所の説話伝承のほかにエリコでの出来事を描いたり取り上げたりしておらず、紀元 1 世紀のユダヤ地方での相対的な地位は高くなかったと推認される。にもかかわらず、共観福音書が共通してこの出来事を「エリコ」と明示しているのは、この地がヨルダン峡谷の中腹に位置しており、主イエスが洗礼を受けられたヨルダン川からエリコを経てエルサレムへと「上っていく」という地理的(空間的)関係に込められた使信が込められているのかもしれない。

・「盲人の癒し」の説話を、「マルコ」は日課箇所の他にすでに一度描いている(8:22 以下)。その箇所は、主イエスがペトロの信仰告白を受けて最初の受難予告をされたことを描く直前に置かれており、日課箇所がいわゆる「受難物語」本編(エルサレム入城から始まる)の直前に置かれていることと並行関係にあると見ることができる。つまり、二つの「盲人の癒し」は、主イエスの「受難の出来事」を弟子たちが理解するために「見えるようになる」ことが求められていることを示唆する説話として機能させられていると解される。

・「ダビデの子イエスよ」という叫びが、47 節および 48 節で繰り返されているが、「マタイ」がこの呼称を主イエスに宛てることに積極的であるのに対して、「マルコ」は慎重な姿勢を示している。「受難物語」中に置かれている「ダビデの子についての問答」(マルコ 12:35~37、マタイ 22:41~46、ルカ 20:41~44)はこの呼称を用いることに否定的な見方を示しており、これが本来の姿勢なのかもしれない。しかしながら、「受難物語」冒頭の主イエスのエルサレム入城の場面では、この呼称を示唆する人々の声伝えられており(11:10)、主イエスの意図にかかわらず人々が主イエスを「ダビデの子」と呼ぶ実態があったのであろう。「盲人」には、そのような主イエス理解の「盲目さ」を示唆する意図もあるのかもしれない。

来週の誕生日 (8 月 16 日~22 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-8「心の底より」(= I 26 番「こころを傾け」)は、16 世紀宗教改革の時代にプロテスタント陣営の傭兵として生きたゲオルグ・ニーゲがルターの「朝の祝福の祈り」に触発されて作詞したとされる「朝の讃美歌」。曲は、民謡の旋律からの編曲。
- ・21-513「主は命を」(= I 332)は、19 世紀リバイバル運動の中で生まれた福音唱歌の代表作。作詞者ハヴィガルは、父が英国教会司祭で、多くの宗教詩を残した(21-512「主よ、献げます」など)
- ・21-429「世界のどこかで」は、教団讃美歌委員会の「新しい讃美歌募集」(1989~95 年)に公募された深沢秋子の作詞に高浪晋一が作曲。深沢秋子は、中学校の英語教師。

21-8「心の底より」**Aus meines Herzens Grunde**

1. Aus meines Herzens Grunde / sag ich dir Lob und Dank / in dieser Morgenstunde, / dazu mein Leben lang, / dir, Gott, in deinem Thron, / zu Lob und Preis und Ehren / durch Christus, unsern Herren, / dein eingebornen Sohn,
2. dass du mich hast aus Gnaden / in der vergangnen Nacht / vor Gifahr und allem Schaden / behütet und bewacht. / Demütig bitt ich dich, / wollst mir mein Sünd vergeben, / womit in diesem Leben / ich hab erzürnet dich.
3. Du wollest auch behüten / mich gnädig diesen Tag / vors Teufels List und Wüten, / vor Sünden und vor Schmach, / vor Feur und Wassersnot, / vor Armut und vor Schanden, / vor Ketten und vor Banden, / vor bösem schnellem Tod.
4. Gott will ich lassen raten, / denn er all Ding vermag. / Er segne meine Taten / an diesem neuen Tag; / ihm hab ich heimgestellt / mein Leib, mein Seel, mein Leben / und was er sonst gegeben; / er machs, wies ihm gefällt.
5. Darauf so sprech ich Amen / und zweifle nicht daran. / Gott wird es alls zusammen / in Gnaden sehen an; / und streck nun aus mein Hand, / greif an das Werk mit Freuden, / dazu mich Gott beschieden / in mein Beruf und Stand.

21-513「主は命を」= I 332**I Gave My Life for Thee**

1. I gave My life for thee, / My precious blood I shed, / That thou might'st ransomed be / And quickened from the dead. / I gave My life for thee; / What hast thou given for Me?
2. I spent long years for thee / In weariness and woe / That an eternity / Of joy thou mightest know. / I spent long years for thee; / Hast thou spent one for Me?
3. My Father's home of light, / My rainbow-circled throne, / I left for earthly night, / For wanderings sad and lone. / I left it all for thee; / Hast thou left aught for Me?
4. I suffered much for thee, / More than My tongue may tell, / Of bitterest agony, / To rescue thee from hell. / I suffered much for thee; / What canst thou bear for Me?
5. And I have brought to thee / Down from My home above / Salvation full and free, / My pardon and My love. / Great gifts I brought to thee; / What hast thou brought to Me?
6. Oh, let thy life be given, / Thy years for Me be spent, / World's fetters all be riven, / And joy with suffering blent! / I gave Myself for thee: / Give thou thyself to Me.